



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行 / カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第十五主日A年（2026年7月12日）

主任司祭 小西広志神父

第一朗読：知恵の書 1 2 章 1 3、1 6－1 9 節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 8 章 2 6－2 7 節

福音朗読：マタイによる福音書 1 3 章 2 4－3 0 節（短い形式）

三つの朗読から

福音朗読では三つのたとえ話が読まれます（毒麦のたとえ、からし種のたとえ、パン種のたとえ）。三つのたとえ話から共通してここに思い浮かべることのできるイメージは「成長」です。「天の国」（「神の国」）は、その人のところの中で成長していきます。最初のごくごく小さく、わずかなものであっても、必ず大きくなっていく。毒麦と混じりあってしまい、麦が見えなくなってしまっても、それでも必ず成長していきます。神の存在、神の思い、神の恵みといったものは人のところの中で豊かに成長していくのです。

第一朗読では、「すべてに心を配る神」、「すべてのものをいとおしむ方」と神さまの姿を言い当てています。神は日常生活の中で働かれる方です。その働きは、人間の一人ひとりを心配し、こころを配るという仕方ではなされるのです。そんな神の姿を知っていれば、たとえ第二朗読にあるように「どう祈るべきかを知りません」と悲嘆に暮れる必要はありません。確かに日常生活には苦難と困難が待ち構えています。それでも、一人ひとりにこころを配る神は、人のこころの深いところで「霊」として存在しておられます。そして「霊」ご自身も、苦しむわたしたちと共に苦しみつつ、「うめき」ながら、わたしたちを天におられる神の方へと向かわせてくれるのです。

福音朗読にある単語に注目しながら、味わってみましょう。まず、冒頭 2 4 節の「イエスは、別のたとえを持ち出して言われた」の「持ち出して」にこだわってみます。

この単語は「前におく」というのが元々の意味です。「イエスは、ほかの喩えを示して仰せになった」と訳すフランシスコ会訳の方が原文のニュアンスに忠実です。「モーセは戻って民の長老たちを呼び集め、主が命じられたこれらの言葉をすべて彼らに提示した」と『出エジプト記』にはあります（1 9 章 7 節）。イエスさまは新しいモーセとして人々の前に神のこころをおき、提示するのです。しかしながら、それを受け入れるかどうかは人々次第です。受け入れた人はイエスさまの「弟子」となり、受け入れなかった人は「群衆」のままなのです。

続いて、25節の「毒麦」についてですが、毒麦は小麦に似た植物です（擬態植物）。若いときには小麦と区別が難しく、しかも根が小麦と入り組んでおり、毒麦を抜こうとすると小麦も抜いてしまいかねません。小麦は穂が出ますが、毒麦は穂が出ません。

最後に30節にある「両方とも育つままにしておきなさい」というイエスさまの言葉に注目してみてください。

たとえの解説の部分（34－43節）では、「世の終わりの裁き」という視点から毒麦のたとえを見ているようです。しかし、30節の箇所だけを味わってみると、「今は裁かない」というメッセージがここに響いてきます。裁くのは神さまご自身です。本当によい麦か毒麦かは人の目には分からないものです。人の目から毒麦と見えていても神さまの目にも同じように見えるとは限らないのです。

イエスさまのもとには罪人と呼ばれる人々が集まっていました。毒麦が混じっているとは罪人がいるということへの批判だったのかもしれませんが。